

尿中微量アルブミン検査の集団検診への導

入の試み

○ 長澤真里 星雄一 宍戸幹夫 小野ちづ

か 佐藤祐二 村野井英子 大内真樹子 渡

辺伸

公財) 福島県保健衛生協会

【はじめに】

糖尿病に合併する糖尿病性腎症は、わが国における慢性透析療法導入の原因疾患の中で第一位を占めている。本症を早期に発見する手段としては、尿中微量アルブミン検査が有用であるとされている。今回、特定健診受診者を対象に尿中微量アルブミン検査を行い、健診結果との関係を検討したので報告する。

【対象と方法】

M町で特定健診と尿中微量アルブミン検査を同時実施した40～74歳の受診者241名を対象

とした。尿中微量アルブミン検査の測定に關しては随時尿を用い、尿中アルブミンとクレアチニンを同時に測定してその比を求め、これを指数（ $\text{mg/g} \cdot \text{Cr}$ ）として用いた。判定区分は、尿中アルブミン値が $10.0\text{mg/g} \cdot \text{Cr}$ 以下を I 群、境界域の $10.1 \sim 29.9\text{mg/g} \cdot \text{Cr}$ を II 群、 $30.0 \sim 299.9\text{mg/g} \cdot \text{Cr}$ を III 群、 $300.0\text{mg/g} \cdot \text{Cr}$ 以上を IV 群とし、各群について比較検討した。

【 結 果 】

各判定区分群の内訳は、I 群 180 名（74.7%）、II 群 39 名（16.2%）、III 群 19 名（7.9%）、IV 群 3 名（1.3%）であった。いずれの群も男女比に大きな差は無く I 群が約 7 割を占めていた。健診結果から 7 疾患（血圧、腎・尿路、糖、脂質代謝、肝臓、血液一般、痛風）の判定区分と各群の分布を比較検討したところ血圧と脂質代謝では群間に差が認められたが、肝臓、血液疾患、痛風では大きな差はなかった。腎・尿路、糖代謝疾患については、母数が少なかった IV 群を除き、群間に異常なし判定の差

と減少傾向が見られた。また、正常域のⅠ群と境界域のⅡ群に限定して各検査項目の比較検討を行った結果、糖代謝疾患のHbA1cを除き他の比較項目で有意差が認められた。

【 考 察 】

(1) 糖尿病性腎症などの慢性腎臓病 CKD では、アルブミン尿、蛋白尿、血尿の存在と推算糸球体濾過量 eGFR の低下とにより分類定義がなされている。今回の検討でも腎・尿路疾患において、尿中微量アルブミンと腎機能との関係を強く示唆する成績が得られた。

(2) 今回は健康診査時における尿中微量アルブミン検査をリスク分類せずに対象者全員に実施したことで、全体に占めるハイリスク者の分布や割合が確認できた。

(3) 正常域のⅠ群と境界域のⅡ群では、腎・尿路疾患と糖代謝疾患を有する受診者における検査項目において有意の差が認められた。

【 ま と め 】

